

グラフ

プライマリ・ケア漢方のすすめ(4)

佐藤 寿一*

はじめに

漢方では、陰陽(虚実・寒熱・表裏)、六病位、気血水、五臓といった漢方特有の“ものさし”を用いて、患者の証を見立てたのち、証に応じた漢方処方を行う。日本漢方では、例えば葛根湯証や大建中湯証というように、漢方薬(方剤)の名称そのものが診断名(証)となる。これを方証相対(薬と証が1対1対応している)という。各々の方剤はその証が示す特徴的な症状や所見があり、患者の症状や所見と一致する方剤を選別する。一方、中医学では、漢方特有の“ものさし”で患者が示す病態(証)を見立てて、各々の証を改善する作用のある生薬を配合して方剤を処方する。これを弁証論治(証を弁別して治療法を考える)という。

I. 証の見立て

患者が漢方的に診てどのような異常状態にあるのかを判定する、すなわち証を見立てることが漢方における診断である。証が決まれば用いる漢方は決まってくる。

証を見立てるには以下の順序で行うとよい。まずは、表裏(疾病の部位)、寒熱(疾病の性質)、虚実(体質および病邪と精気(抵抗力)の盛衰)を概

括する。これを八綱弁証という(図1)。なお、表裏両者の性質を持つものは表裏同病、表と裏の境目に病邪があるものは半表半裏、寒熱両者の性質を持つものは寒熱錯雑、虚実両者の性質を持つものは虚実錯雑という。

八綱弁証を行ったら、次に病因について考察する(病邪弁証)。中医学では人を発病させるに十分な病邪を形成する要因ないし条件を病因といい、身体の外から身体の中に入り込むもの(外因)、感情が高まり過ぎて心身の失調を招くもの(内因)、それ以外のものの三種に分類する(表1)。

そして、外邪が病因となっている外感熱病であれば六病位のいずれに属するかを判定する(六経弁証)。内傷雑病(病因が内因または不内外因)であれば、気血水の異常について検討し(気血津液弁証)、ついで臓腑の異常を弁別する(臓腑弁証)。

II. 方剤処方と効果判定

患者の証を見立てたならば、処方すべき方剤は自ずと決まってくる。表2にプライマリ・ケアの場における有用性が高く、頻用されている35種類の方剤の各弁証と使用目標を示す。使用目標で、臨床症状・所見に合うものを抽出し、見立てた証と一致するかどうかを確認して処方を行うとよい。

漢方の効果発現までの時間については、比較的短時間で現れるもの(例えば解表剤など)もあれば、服用を続けていくうちに徐々に患者の体質を変えていくものもある。即効性のものは数

— Key words —
方証相対, 弁証論治, 八綱弁証, 病邪弁証, 六経弁証, 気血津液弁証

* Juichi Sato : 名古屋大学医学部附属病院総合診療科 病院教授

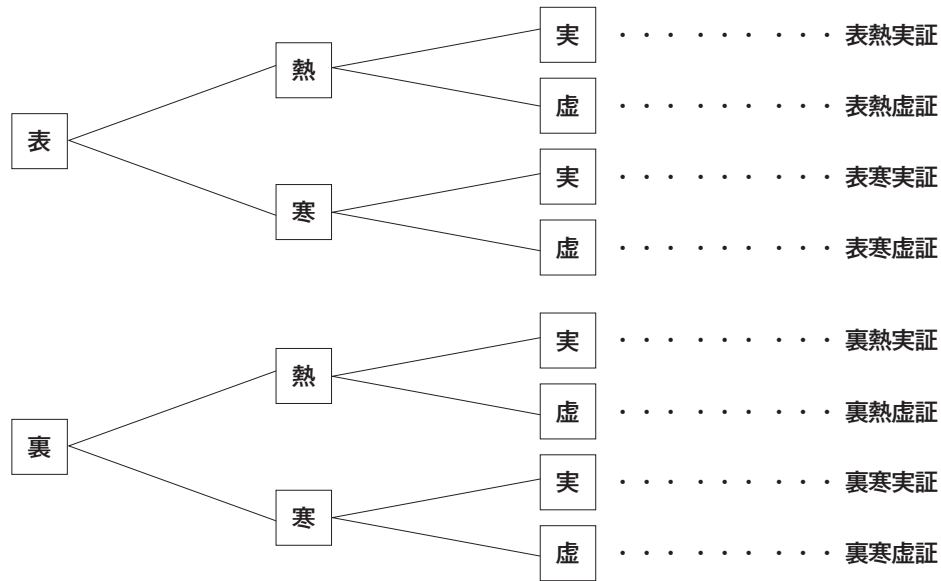


図1 八綱弁証

表1 病因の分類

①外因
六淫：風邪，寒邪，暑邪，湿邪，燥邪，火邪 春は風，夏は暑，火，長夏(土用)は湿，秋は燥，冬は寒の季節(六気)である。それが度を超すと六淫となり外邪となる。
②内因
七情内傷：喜，怒，憂，思，悲，恐，驚(プライマリ・ケア漢方のすすめ(2)を参照)
③不内外因
飲食不節，飲食不潔，労倦安逸，外傷，痰飲(水滯)，瘀血

日後に効果の確認を行う。場合によっては外来で服用していただき1～2時間で効果について判定を行う。効果発現に時間がかかるものについては2週間分あるいは4週間分処方して，次回外来時に効果について確認を取るとよい。

Ⅲ．副作用の注意

「漢方薬には副作用がない。」という話を聞くとあるが，それは誤りであって，漢方薬が薬である(人体に何らかの影響を与えるもの)以上，副作用は起こりうるのである。実際にくすり相談窓口で相談を受けた医療用医薬品のうち，漢

方製剤による副作用発現頻度は3.5%という報告がある。漢方薬(方剤)は何種類かの生薬で構成されているが，生薬の中には副作用を起こす可能性が少なからずあるものがある。その代表的な生薬について解説する。なお，表2に各方剤に含まれる下記の生薬について記載した。

①黄芩：抗炎症効果を有する生薬である。かつて肝炎による肝機能障害に有効とされ，構成生薬として黄芩を含有する小柴胡湯がしばしば用いられていたが，その中で，肝機能障害が悪化した例や，間質性肺炎が出現した例の報告が相次いだことがある。

表2 頻用漢方方剂 35 選

方剂分類	方剂名	八綱弁証	六経弁証	気血津液弁証	臓腑弁証	使用目標	副作用の危険がある生薬
解表剂	桂枝湯(けいしとう)	表・寒・虚	太陽病		風邪襲表・営衛不和	発汗・悪風	甘草
	葛根湯(かっこんとう)	表・寒・実	太陽病		風寒襲表・営衛不和	悪寒・発熱・無汗・頭痛・肩凝り	甘草、麻黄
	小青竜湯(しょうせいりゅうとう)	表裏同病・寒・虚実錯雑	太陽病	水滯	外感風寒・内停水飲	水様性鼻汁	甘草、麻黄
	小柴胡湯(しょうさいこうとう)	半表半裏・熱・虚	少陽病	気鬱・水滯	肝鬱・脾虚	胸脇苦満・往来寒熱・食欲不振・口苦・口渴・めまい	黄芩、甘草、人参
和解剂	芍薬甘草湯(しゃくやくかんざうとう)	裏・寒・虚	太陰病	陰血不足		筋痙攣・腹痛・生理痛	甘草
	加味逍遙散(かみしょうようさん)	裏・熱・虚	少陽病	気血両虚・瘀血	肝鬱・脾虚	上熱下寒・胸脇苦満・不定愁訴	甘草、山梔子
	半夏瀉心湯(はんげしゃしんとう)	裏・寒熱錯雑・虚実錯雑	少陽病	水滯	胃気不和	心下痞硬	黄芩、甘草、人参
	大柴胡湯(だいたいさいこうとう)	裏・熱・実	少陽病	気滯・瘀血	肝鬱・胃腸鬱熱	胸脇苦満・往来寒熱・口苦・便秘	黄芩、大黄
表裏双解剂	防风通聖散(ぼうふうつうせいさん)	表裏同病・寒熱錯雑・虚実錯雑	少陽病 / 陽明病			腹部膨満・肥満・便秘	黄芩、甘草、麻黄、山梔子、大黄
瀉下剂	桂枝加芍薬大黄湯(けいしかしゃくやくだいおうとう)	裏・寒・実	太陰病	気虚・血虚	脾虚	便秘・しぶり腹	甘草、大黄
	麻子仁丸(ましにんがん)	裏・熱・虚	少陽病	気滯・血虚・津液不足	大腸陰虚	高齢者の便秘	大黄
清熱剂	黄連解毒湯(おうれんげどくとう)	裏・熱・実	少陽病 / 陽明病		心火旺・肝胆火旺・胃熱	のぼせ・易怒性・皮膚掻痒症	黄芩、山梔子
	清肺湯(せいはいとう)	裏・熱・虚	少陽病	気逆・水滯	肺気陰両虚・痰熱	慢性咳嗽・粘稠痰・のぼせ	黄芩、甘草、山梔子
温裏補陽剂	大建中湯(だいいけんちゅうとう)	裏・寒・虚	太陰病	気虚	脾胃虚寒	腹部膨満感・腹部の冷え	人参
	真武湯(しんぶとう)	裏・寒・虚	少陰病	水滯・気虚	腎陽虚・水沱	浮腫・冷え・下痢	附子
補気剂	八味地黄丸(はちみじおうがん)	裏・寒・虚	少陰病	水滯・気虚	腎陽虚	少腹不仁・虚勞・頻尿	附子、地黄
	六君子湯(りくくんしんとう)	裏・寒・虚	太陰病	気虚・水滯	脾胃虚・痰飲	心下振水音・胃膨満感・易疲勞	甘草、人参
補血剂	補中益気湯(ほうちゅうえきとう)	裏・寒・虚	少陽病	気虚	脾胃虚・中気下陷	食欲不振・易疲勞	甘草、人参
	啓脾湯(けいひとう)	裏・寒・虚	少陽病	気虚・水滯	脾胃虚弱	慢性下痢・瘦せ	甘草、人参
気血双補剂	四物湯(しもつとう)	裏・寒・虚	太陰病	血虚	肝虚	顔色不良	地黄
	十全大補湯(じゅうぜんたいはいとう)	裏・寒・虚	太陰病	気血両虚	脾胃気虚・心肝血虚	疲勞倦怠・食欲不振・顔色不良	甘草、人参、地黄
滋陰剂	人參養榮湯(にんじんようえいとう)	裏・熱・虚	太陰病	気血両虚	脾胃虚・肺気虚	疲勞倦怠・食欲不振・顔色不良・息切れ	甘草、人参、地黄
	加味帰脾湯(かみきひとう)	裏・熱・虚	少陽病	気血両虚	心脾両虚・肝火旺	疲勞倦怠・多思多慮・いらいら・不眠	甘草、山梔子、人参
理気剂	六味丸(ろくみがん)	裏・熱・虚	太陰病	血虚・津液不足	肝腎陰虚	口渴・熱感・思考力減退	地黄
	半夏厚朴湯(はんげこうぼくとう)	裏・寒・実	少陽病	気滯	胃気上逆・肺気逆	抑うつ・咽喉頭異常感・梅核気	
安神剂	抑肝散(よくかんさん)	裏・熱・虚実錯雑	少陽病	気血両虚・気滯	肝陽化風	胸脇苦満・易怒性・易疲勞	甘草
	甘麦大棗湯(かんばくたいそうとう)	裏・熱・虚	少陽病	気虚・気逆	心気陰両虚	夜泣き・ひきつけ・ヒステリー発作	甘草
利水剂	柴胡加竜骨牡蠣湯(さいこかりゅうこつぱれいとう)	裏・熱・虚実錯雑	少陽病	気滯	肝鬱・脾虚・肝陽上亢	胸脇苦満・心下痞硬・耳鳴・動悸・不眠	黄芩、人参
	五苓散(ごれいさん)	表裏同病・虚実錯雑	太陽病	水滯	脾虚	浮腫・下痢・頭痛	
驅瘀血剂	半夏白朮天麻湯(はんげびやくてんまとう)	裏・寒・虚	太陰病	気滯・水滯	脾気虚・痰湿	浮動性めまい・頭痛・頭重・易疲勞・食欲不振	人参
	当帰芍薬散(とうきしゃくやくさん)	裏・寒・虚	太陰病	血虚・水滯	脾虚	貧血・腹部の冷え	
	苓桂朮甘湯(りょうけいじやくかんとう)	裏・寒・虚	少陰病	気滯・水滯	脾虚・痰飲	回転性・浮動性めまい・頭痛・易疲勞・悪心	甘草
	桂枝加朮附湯(けいしかじよふとう)	表・寒・虚	太陽病	気鬱・水滯	風寒阻滯経絡	関節痛・神経痛	甘草、附子
	桃核承気湯(とうかくじょうきとう)	裏・熱・実	陽明病	瘀血・気滯		小腹急結・月経困難・便秘	甘草、大黄
	桂枝茯苓丸(けいしふくりょうがん)	裏・熱・実	少陽病	瘀血・気滯		月経困難・更年期障害・のぼせ・頭痛	

肝機能障害に関しては、定期的に採血し肝機能を確認することで早期の発見に心がける。また、間質性肺炎に対しては、呼吸困難、乾性咳嗽、発熱等の症状に留意する必要がある。

- ②甘草：各構成生薬の作用や毒性を緩和する，胃腸機能を整える，緊張を和らげる，鎮痛などの薬能を有しており，医療系漢方製剤の約70%に含まれる生薬である。グリチルリチン酸を含有しており，偽アルドステロン症を引き起こすことがある。血圧上昇，浮腫，動悸などの症状の出現に留意する必要がある。血液検査で血清カリウム値低下，血漿レニン活性低値がみられる。
- ③麻黄：発汗とともに外邪を追い出す，咳を鎮めるなどの効果を有し，葛根湯や麻黄湯などに含まれる。重要な成分はエフェドリンで，中枢神経症状(興奮，不眠)，心血管症状(動悸，血圧症状，不整脈)，消化器症状(食欲不振，悪心)，排尿障害などの副作用に注意する。
- ④山梔子：興奮を抑える，炎症を抑える，解毒するなどの効果を有し，加味逍遙散，防風通聖散，黄連解毒湯などに含まれる。長期内服で，腸間膜静脈硬化症(腸間膜静脈壁石灰化)を引き起こす例が報告されている。腹痛の症状に留意する。
- ⑤附子：猛毒性アルカロイドのアコニチンを成分とする生薬(生薬として用いるときは毒性を除去する処理がなされている)で，陽気を補い，寒をとり去る，痛みを抑える効果を有する。八味地黄丸，真武湯，桂枝加朮附湯などに含まれる。過量になると動悸，のぼせ，舌のしびれ，悪心などの症状が現れる。高血圧患者，頻脈性不整脈を有する患者はとくに要注意である。
- ⑥大黄：瀉下効果，炎症を抑える効果を有する生薬で，有効成分はセンノサイドである。桂枝加芍薬大黄湯や麻子仁丸などの瀉下剤のほか，大柴胡湯，防風通聖散，桃核承気湯などにも含まれる。腹痛や下痢といった副作用のほか，子宮収縮作用もあるので妊婦や授乳中の女性への使用は避けた方がよい。

- ⑦人参：気を補う作用を有する生薬で有効成分はトリテルペノイド配糖体(ギンセノシド)である。六君子湯や補中益気湯などの補気剤，十全大補湯や人参養栄湯などの気血双補剤，大建中湯などに含まれる。副作用として，発疹などの過敏症状が出現することがあり，実証タイプに用いると頭痛，のぼせ，血圧上昇などが生じる危険性がある。
- ⑧地黄：血を補う作用を有する生薬で有効成分はテルペノイドである。四物湯，十全大補湯，人参養栄湯などの補血剤，六味丸，八味地黄丸などの腎気丸類に含まれる。消化しにくい生薬で胃部不快感，食欲不振，下痢といった副作用が生じやすいので胃腸が弱っている人に用いるときには注意が必要である。また発疹，発赤，かゆみなどの報告もある。

おわりに

現代の医療において，現代西洋医学によるアプローチだけでは対応できない健康問題が多々ある。それでも地域の第一線で活躍するプライマリ・ケア医は患者が抱えるあらゆる健康問題に対応しようとする。そのような時に現代西洋医学とは異なった概念，学問体系を有する漢方が役に立つことがある。漢方診療では患者の現在の心身の状況を把握し，いわゆる正常の状態からのずれを評価し(証を見極める)，そのずれを整える。その結果として患者が抱える健康問題の改善に寄与する。

本シリーズでは，漢方の概念，証の捉え方，漢方における診察法，漢方処方を選択について概説した。プライマリ・ケアにおける漢方診療の参考にしていただけると幸甚である。

利益相反

本論文に関して，筆者に開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 日本漢方医学教育協議会編：基本がわかる漢方医学講義. 羊土社. 2020.
- 2) 秋葉哲生：活用自在の処方解説：広い応用をめざした漢方製剤の活用法. ライフ・サイエンス. 2009.